

## 浄瑠璃に見られる保元受容

原水民樹

浄瑠璃には、『保元物語』を本説とする、あるいはそれとの関わりをもって生み出された作品がいくつかある。小稿は、それらの中から『ちんぜいノ八郎ためとも』『ため朝一代軍記二之巻』『勇士の三つ物』『鎌田兵衛名所盃』『鎮西八郎唐土船』『鎮西八郎射往来』『崇徳院讃岐伝記』の七作について、『保元物語』利用・摂取の様態、保元の乱認識のあり様、及び為朝形象に視点を当てて通覧するものである（適宜『平治物語』にも及ぶ）。『保元物語 平治物語』については古典大系本付録の古活字本を使用する。

### 一、ちんぜいノ八郎ためとも

考察は横山重氏等編『古浄瑠璃正本集』第四（角川書店 昭40）所収の翻刻による。該作については、水谷弓彦氏『絵入浄瑠璃史』中巻（精華書院 大5）や、若月保治氏『古浄瑠璃の研究』第一巻（櫻井書店 昭18）に簡明な解説や梗概が載る。また、阪口弘之氏によると、「従来単独作と見做されてい」たが、実は「七日構成」の連作物の「初日に相当す

る」という<sup>①</sup>。

まず、梗概を記す。為義は、洛中で狼藉を働いた子息の為朝に事の真偽を質す。席上為朝が兄たちと口論に及んだため、怒った為義は、為朝を豊後国に追放する。しかし、為朝は豊後においても「さま／＼のあくきやく」をなしたので、うすきの兵衛らを大将とする二千余騎が追討に向かう。これを撃ち破った為朝は、主立った者を生け捕るが、後に赦免する。その寛容に感じた武士達が臣従を誓ったので、為朝は九州制覇を急ぐ。筑後国の住人、あしやの蔵人は、酒席を設けて為朝を討とうと謀るが、逆に討たれる。九州の諸大名ことごとく帰服するに及び、為朝は、礼をもって彼らを遇し、源氏への与力を依頼したので、皆心服した。

『保元物語』の記すところによれば、為朝は「幼少より不敵にして、兄にも所ををかず、傍若無人」であったため、父為義の勘当を受けて「十三のとしより鎮西の方へ追下」され、豊後国に居住したが、「三年が間に九國を皆せめおとして、をのづから惣追捕使に推成」った。これは、保元の乱以前の

為朝の閲歴であり、為朝が鎮西八郎と称される由縁談でもある。該話を本説として本作は脚色・作出されている。また、状況設定や本文等にも『保元物語』にのっとった事実が認められる。実例を挙げると、為義の子供に「長なんには、しもつけのかみよしとも、四郎左衛門よりかた、五郎かものすけより長、六郎ためむね、七郎ためなり、八郎くわんじやためとも」の名を掲げるのは、物語の記す保元の乱の参戦者「下野守義朝」「四郎左衛門頼賢・五郎掃部助頼仲・賀茂六郎為宗・七郎為成・鎮西八郎為朝・源九郎為仲」を踏まえたものであり（『保元物語』の異本中、鎌倉本・金刀本はさらに三郎先生義憲を加える）、為朝の供人、たいやの新三郎・大ゆみの悪七べつたう・三町つぶての喜平次・てとりの與次郎は、やはり物語の記す彼の手郎等、大の矢新三郎・あきまかぞへの悪七別當・三町礫の紀平次太夫・手取の与次、に従ったものである。また、文辞面においても、例えば

すぢふとく、めかと、二つにきれて、すさましく、ちからはもとより、むまれつきたる大ぢから、弓は、てんねんとそなわつたる、めいじんたり、ことに、ゆんでのかいな、めてより四寸ながく、やづかをひく事、人にすぐれ、も、やをいても、やつほをはづさず、こゝんふそうの、ゆうし

也

(201下3)

との為朝描写が、物語の

件の男、器量人にこえ、心飽まで剛にして、大力の強弓、矢統早の手聞なり。弓手のかひな、馬手に四寸のびて、矢

づかを引事世に越たり。(略) 為朝は七尺計なる男の、目角二つ切たるが、

(356上7及び下16)

に拠っていることは明白である。

要するに、該作は、独自の展開を持ち、架空の人物の登場も多いが、『保元物語』の記載事項や本文を基底として発想された作品と捉えられる。

それでは、該作において、為朝はいかに描かれているか。端的に言えば、典型的な荒者、これが本質である。酒宴の僧達への狼藉及び九州での濫行ぶりは、「ほうじやくぶじん」あくじ、せんりを、はしる」「さま／＼のあくきやくは、みのもよだつばかり也」と評される。ただ、そうした「あくじ」をあげつらうわりには為朝を指弾する筆鋒は存外に弱く、むしろ「かのためとももの、ていたらく、あつはれむるいのあら物やと、さてほめぬものこそなかりけれ」と、「むるいのあら物」ぶりを嘆賞する口吻である。また、一旦は生け捕った敵を解放する仁者としての面も付与されている。つまるところ、「あくにつよければ、ぜんにもつよきとは、君の事をや申らん、た、あら人かみとのみ、うけたまわりしに、なさけのみちも、ふか、りける」との、うすきの兵衛等の評が為朝の造型理念と判ぜられる。さらに言えば、九州における濫行の目的が、所領奪取ではなく「けんしのかもの、はたじたなりと、せけんにしらせん、ため」、すなわち九州が源氏の麾下にあることを世に認めさせるためであると説明されるに及び、具体的事実としての悪行は、その名分の故に通常の善

悪の範疇を超えて、武門の棟梁清和源氏の家に生い育った者に課された宿命に解消されてゆく。要するに、該作においては、尋常の善悪の尺度から解放された痛快無比の武人英雄の姿が、無邪気にかつ生彩を放って描き出されているといえようか。もつとも、これほどの為朝も、父には頭が上がらず、その叱責の前には「とかふの、へんとうにもおよはず、さしうつむ」き、勘当されるに及んでは「た、しほくと成」るばかりである。しかし、相手が長兄義朝や四兄頼賢となると一歩も引かず口論に及び、果ては「よし／＼是も、ちからなし、さきにむまる、けんへいに、いかやうとも、はからひ給へ」と居直る始末である。ここに見られる孝並びに不悌の設定もやはり『保元物語』から持ち込まれている。物語が、為朝を孝子としていること、しかし、兄に対しては「幼少より不敵にして、兄にも所ををかず」、「兄達をもないがしろにするえせもの」として描くこと勿論である。

(1) 「軍記読物浄瑠璃の成立―浄瑠璃と草子本―」(人文研究) 第37巻第7分冊 昭60・十二

(2) ( )内は本文の所在位置を示す。例えば、(201下3)は当該本文が二〇一頁下段第三行にあることを示す(本文が数行に及ぶ場合は初行の位置)。以下についても同表示を行う。

(3) 例えば、為朝が豊後国の住人「石村重蔵(平蔵)国しげ」の「ふなひの城」を根城としたとの記事は、「豊

後國に居住し、尾張権守家遠を乳母とし、肥後の阿曾の平四郎忠景が子、三郎忠國が聲に成て」との『保元物語』の記載には依らない。

## 二、ため朝一代軍記二之巻

考察は、『古浄瑠璃正本集』第十(角川書店 昭57)所収の翻刻による。初めに梗概を記す。

「ちんぜい九か国を、こと／＼く打かたふけ」た為朝は、豊前国くまがたけに威を張るあくらのとうれうを虜としたが、あくらは風雨について脱獄する。討伐に向かった為朝は、あくらの次男三しん丸を討ち取るが、あくらと嫡子くんがう太郎は逃亡する。これを追った為朝は、途中で出会ったよらの善ようたき口を家来とし、田中の庄司に一宿を求め、庄司には、りうのひめなる娘がおり、村しま行へはるつぐの横恋慕に困惑している。為朝は村しまを論し、後に、りうのひめと結婚する。しかし、村しまが報復のため、庄司を生け捕りにしたので、為朝は家臣のとう九郎家すへの知略を借りて庄司を救出する。

正本集付載の解題に「本書は、『ため朝一代軍記』とはいへ、内題に『二之巻』とあるやうに、為朝伝説の一齣を描いたものに過ぎぬ。やはり、本来は、他のこの種の浄瑠璃同様に、七巻構成であらう。」と説かれている。また、あくらが討たれる記事が存在しないことなどより、「改刻や省略のある再印本」と判断されている。前に扱った『ちんぜいノ八郎

ためとも』が「本作の前編に位置する」ことも指摘されている。確かに「八郎くはんじや為とも、父のかんどうかうふり、つくしへおい下され、ちんぜい九か国を、こと／＼く打かたふけ、ぶんごの国に、御ざをすへ、なをしも、御てにいらぬ（まじ）□い／＼所々をあいなびけん（け、一身力）、外のともがら、かそふるに、いとまあらず」と、為朝の九州制覇が成った時点から語り始める該作は、都を追放された為朝の九州平定の経緯を語る『ちんぜいノ八郎ためとも』の後日談的性格を持つといえる。

該作は、筋においても本文面でも『保元物語』に依拠するところがほとんどない。ただ、為朝の家来として登場する三町つふての喜平次・て取の与次・悪七へつたう・とう九郎家すへが、『保元物語』の記す、三町礫の紀平次太夫・手取の与次・あきまかぞへの悪七別当・箭前弘の須藤九郎家季、に依っていることは明らかだし、また、為朝が兄への不悌を悔いる場面は、彼が「幼少より不敵にして、兄にも所をか」なかつたとする『保元物語』の記事を背後に持つ。この点で、『保元物語』の世界が基調にあると言える。

該作における為朝の本領は言うまでもなく傑出した勇武である。「為とももの御ふるまひ、只、人間のわさならずと、きせん上下をしなへ、みな、かんせぬものこそなかりけれ」、「かのためとものはたらき、た、鬼神も、かくやらんと、みな、かんせぬものこそなかりけれ」、「為ともものゆう力、善ようがちりやく、あつはれ、天ちわごうやと、きせん上下をしなへて、みな、かんせぬものこそなかりけれ」といった、段末評

言がこれを端的に語る。

また、該作には勧善懲悪思想が濃厚に認められ、為朝にもこの属性が付される。「あらし様にて、じひふかく、ちゑこうたい也、是ぞ、ちじんゆうの三どくをかねさせ給ふめい大将」と性格づけられ、『ちんぜいノ八郎ためとも』に比し、荒者たる面が後退し、秩序を重んじる統治者としての面が押し出されている。為朝がしばしば口にする「一人あく人あれば、ばんみんのあたとなる」「一人をはつして、諸人のたすけとなす」との言は、統治する立場からのそれである。また、あくらに対する為朝の言「汝は、国のしゆごにもしたかはず、わかま、ふるまふと聞、此天ちの間は、みな、わうぢたり、それにすまんものが、わかま、をいわば、いわせておくへきや、」には、明確な王土観が認められ、王権に基づく秩序を是とする姿勢が読み取られる。

しかし、そういう為朝も、九州を掠奪し国家秩序を乱す濫行者であることに変わりはない。あくらは、国司にまつろわぬ暴徒だが、あくらに言わせれば、為朝もまた「都よりながされ、つくしを、只一人めぐり、わがま、をふるま」う無頼の徒である。ただし、為朝は「げんしのうち神正八まん大ほさつ」の庇護を受ける貴種であり、あくらは単なる山賊に過ぎない。為朝は正義の士で、あくらは悪人、これが動かぬ前提として存在する。客観では、あくらと同質の所業をなしながら、為朝が批判からまぬかれている点は『ちんぜいノ八郎ためとも』と同様である。既に伝説的英雄として定着した人

物を、改めて善悪の尺度で計り直すことはない。為朝が勧善懲悪を指針として行動しているとすれば、なおのことである。為朝を支える勸懲思想は、彼をして「此間、つくし九ヶ国打取、なを、ふかきのぞみあり、(略)日本を、てに入、はんみん、あくにおち入」を救わん、とまで言わせる。これは、自ら日本の覇者たろうとする、甚だおおけない宣言の筈だが、それも「はんみん、あくにおち入」るを救うとの名分を根拠とする故に容認される。

また、兄達が父の為義に自分の宥免を願ったと聞いた為朝は「われ、わかけゆへ、あにたちをも、様々あつこういたせしに、おと、と思召、さへぎつて、御せせう有事、もつへきものは、兄弟也」と前非を悔いる。『ちんぜいノ八郎ためとも』に見られる、兄と口論して嘯く為朝の面貌はそこにはなく、孝・悌が為朝像を支える。

以上、該作における為朝は『ちんぜいノ八郎ためとも』に比して、荒者としての要素が少なく、仁者の色合いを濃くしている事実が認められるが、これを九州制覇を遂げた後の統治者への変貌と解釈することも可能であろう。

### 三、勇士の三つ物

考察は、『古浄瑠璃正本集 角太夫編』第三卷(大学堂書店 平6)所収の翻刻による。

まず、梗概を記す。人王七十四代のごとばのゐんは、一の宮ではなく、当中宮腹の二の宮に位を譲りたいと思ってい

る。中宮の兄の右大将くにとらは、賀茂の神官兼久らをかたらい、一の宮を仏門に入れよとの賀茂の神託が降ったと偽奏させたので、帝は一の宮を出家させるべく仁和寺に送り込む。一の宮の子を懐妊していた中納言すけかたの女初姫はこれを聞き深く嘆く。郎等のかまだ兵衛正清から報せを受けた為朝は、仁和寺に急行して宮を救出し、笠城に立て籠もる。義朝は為朝濫行の責を負って解官され、平のはんぐはんもり国が為朝追討に向かう。為朝は奮戦の後、宮を擁して南都に落ちる。宮の子を産み落とした初姫は、かまだの妻のうすぐもに助けを求め、追って来たくにとらは、間違えてうすぐもの子を殺す。為朝は舅の三笠の庄司を頼って南都に忍んでいたが、三笠の庄司は恩賞ほしさに為朝主従を討とうと企む。妻の面影の注進によりこれを知った為朝は庄司を厳しく罰する。その頃、義朝の宿所に兼久が訪れ、くにとらの謀計を白状したので、義朝は参内して、くにとらの陰謀を暴く。一の宮は初姫を伴い御所に帰還した。恩賞として、義朝はさまのかみに、為朝はつくしの惣追ぶしに任じられ、源氏は栄え、世は治まった。

該作の主題は為朝と義朝が協力して奸臣くにとらを斥けるというもので、描くところは仮構であり、登場人物も為朝や義朝・鎌田正清等数人を除いて多くが架空である。ただし、構想や人物設定及び本文の一部を『保元物語』『平治物語』に求めている。

まず、「人王七十四代。ごとばのゐん」(史実では、第七十

四代は鳥羽)が、「中宮のようしよく成にまよ」ひ、一の宮を差し置いて二の宮に皇位を譲ろうとする設定は、鳥羽が正嫡の崇徳を退位させ、愛妃美福門院得子との間に生まれた近衛を位に即けた旨の記事を手懸かりにしているようし、一の宮の母、ごたいけんもんゐんは、崇徳の母待賢門院璋子からの連想であろう。また、為朝の放った矢が伊藤六の胸板を貫通し、勢い余って伊藤五の鎧の袖をも射抜いたとの『保元物語』の記事を、該作は、為朝と追討軍との合戦中に、対戦相手の名も「いとう五いとう六」そのままに利用している。さらに、くにとらの陰謀を退けた恩賞として、義朝が「さまのみ」に、為朝が「つくし」の「惣追ぶし」になる点についても、経緯は異なるが、二人の経歴自体は、史実もしくは『保元物語』の記事に負っている。

『平治物語』との関わりについては、敵役の右大将くにとらが、藤原信頼から発想されただろうことが、「う大しやう」との官職および「まうあくふだうのねいじん。くんおんにほこり」との記述から推し量られる。同じく、為朝の家来しぶやのこん王は義朝の従童金王丸に発しているよう。また、三笠の庄司むね重による婿の為朝謀殺の企ては、長田庄司忠致が主君義朝と婿の鎌田正清を殺した記述を源泉としようが、系譜的には、次の『鎌田兵衛名所盃』に述べるように、舞曲『鎌田』や説経『鎌田兵衛正清』などの影響下にあるよう。

本文利用については左掲のごとき事例が特に目に付く。

① 天下おだやかにしよかんも節をあやまたず。たみもゆ

たかに御平あん。

〔勇士〕444上7)

海内静にして天下おだやか也。寒暑も節をあやまたず。民屋もまことにゆたか也。

〔保元〕345下9)

② 此ためとも申はきんりよく人に事すぐれ。心あくまでかうにして。大力のつよ弓。矢つぎばやの手き、にて。弓手のうでめてに四寸のびければ。矢つかを引ことしよ人にこへ。こ、んめいよのゆうしなり。

〔勇士〕447下8)

件の男、器量人にこえ、心飽まで剛にして、大力の強弓、矢統早の手聞なり。弓手のかひな、馬手に四寸のびて、矢づかを引事世に越たり。

〔保元〕356上7)

③ てんちにななふを帝とせうじ。やどらせ給ふ御ときより。しよ天是をしゆご有て世三天其とくをわけ。あたへ給ふゆへにこそ。天子とはしやうずといへり。

〔勇士〕449上9)

天地にかなふ人をば帝と称し、仁義にかなふひとをば王と称すといへり。正法念経には、はじめ胎中にやどり給時より諸天これを守護す。世三天、其徳をわかちてあたへ給ふ故に、天子と称すといへり。〔保元〕389下14)

④ 三年竹のふし近成を。すこしをしみがいて。やまどりのをにてはいたる大かりまたゑいやつと引かけ。しばらくかためためらふところに。(略)為朝見給ひ。ヤア。塩らしき武士。いでこんじやうのめんぼく。又は後世の思ひ出に。うけて見よとひやうどいる。まつさきにす、

んだる。いとう六がむないたいをし。あまる矢がいとう五が。たゞ中をいぬきければ。兄弟馬よりどうぞおち。同まくらにたをれける。 (『勇士』45上8)

且は今生の面目、又は後生の思出にもせよ。」とて、三年竹の節近なるを少をしみがきて、山鳥の尾をも<sup>③</sup>て作だるに、七寸五分の円根の、篋中過て、篋代のあるを打くはせ、しばしたも<sup>④</sup>て兵ど射る。真前に進だる伊藤六が、胸板・押付け射とをし、余る矢が、伊藤五が射向の袖にうらかひてぞ立<sup>⑤</sup>たりける。六郎は矢場に落て死にけり。 (『保元』362上4)

各番号における両者の本文を併せ見れば、『勇士の三つ物』が『保元物語』の本文を下敷きとしていることは明白である。以上、保元・平治の乱そのものを素材とはしないが、該作が構想・人物・本文において、『保元物語』及び『平治物語』(その影響下に成った舞曲・説経をも含む)に負う事実を確認した。

では、為朝はいかなる造型をされているか。以下、この点を見る。為朝像を構築する主要素は剛勇と忠である。その剛勇ぶりは、摩利支天・鍾馗・不動明王・金剛童子・八大龍王に準えて描かれる。忠については、一の宮に出家を強要するごとばのゐんを「中宮のようしよく成にまよはせ給」うたためかと難じ、また一の宮の出家は賀茂明神の神託によるとの、くにとらの主張に対しては「かも明神の一代の出そこない」と痛罵、一の宮を奪還して笠城に立て籠もる。その言行

は「仏神のれいたくをけづり。天子のちよくぢやうあさむく」反逆者の印象を与える。権威に抗う為朝の形姿は、不当な解官・院参停止処分に甘んじ「ふかくのなみだもろともにかたをさしてぞ帰」り、謹慎して時節の到来を静観する義朝とは対照的である。しかし、無法と見える行為も、くにとらの陰謀を排し、正嫡一の宮の登祚を願う忠心に根ざすものであつてみれば、その本質は「仁有義有ちゆう有。あつはれきたいのもの、ぶ」である。その他、為朝の属性として、弁舌に長じた面、恋の道には未練な面などを付与する。

#### 四、鎌田兵衛名所置

近松門左衛門作。『正本近松全集』第六卷(勉誠社 昭53)の解題によれば、「宝永末年正徳に近い頃」、「近松全集」第六卷(岩波書店 昭62 本文引用は該書による)の解説によれば、正徳元年(一七一)正月二十一日以前の上演と推定される由。

筋については、『近松全集』等に要を得た梗概が付されている。また、該作が『保元物語』や幸若舞曲『鎌田』等を下敷きとしている点については、既に先学の指摘がある。<sup>①</sup>

要するに、該作は、『保元物語』の記す保元の乱の内容と、『平治物語』の記す平治の乱の内容を一連の出来事として融合・脚色したものと認識されるのだが、まず、『保元物語』との係わりについて述べるなら、前半部における、後白河帝と新院讃岐の王子との皇位争い、讃岐の王子に与した為義

と、後白河方の義朝・清盛との合戦、そして讃岐の王子の敗北と為義の処刑に到る筋立ては該物語を本説とし、細部においても種々利用の痕が見られる。例えば、為朝が伊藤五・六を射る場面は物語に材を得ているし、大尾で、為朝が「我は日本手にたらず。鬼が島へ渡つて鬼をしたがへ世の中の。悪鬼をしづめて世は太平」と、鬼ヶ島渡りを示唆するのは、物語の結章「為朝鬼が島に渡る事<sup>並びに</sup>最後の事」を念頭においたものと言える。こうした筋立てのみならず、本文面でも撰取の痕が認められる。例示すれば、

原 水 民 樹

① 観経とやらん申御経には。此しやばせかいはしまりて十悪五逆の罪人。其数無量といへ共親をころせし悪人は。一万八千人ととかれしとや。(『名所盃』477-11)  
 観経には、劫初より以来、父を殺す悪王一萬八千人なりといへども(『保元』378上19)

② 忠臣は孝子の家より出ると申本文(『名所盃』485-9)  
 「忠臣をば孝子の門にもとむ。」といへり。(『保元』380上7)

のごときである。

後半の、義朝都落ちから長田庄司による義朝弑逆の謀計に至る展開は、謡曲『鎌田』・舞曲『鎌田』・古浄瑠璃『待賢門平氏合戦』・『平治合戦 鎌田最後』・説経『鎌田兵衛正清』等からの流れが想定され、該作が舞曲や説経から受け継いだ要素及び改変の道筋が、部分的ながら原道生氏により報

告されている。

それら先行作の影響は、鎌田謀殺場面及び鎌田の妻の描出に顕著である。鎌田謀殺について、本説の『平治物語』は、「鎌田兵衛は、忠宗に向けて酒をのみけるが、此よしをき、てつい立所を、酌取ける男、刀をぬいてとびかゝる。政家とて引よせ、其かたなをも<sup>②</sup>て二刀さす所を、うしろより景宗本頸をう<sup>③</sup>てうちおとす。」と簡略だが、舞曲等では酒宴の様が詳述され、内容は『名所盃』に似通う。長田が貝の盃をもつて鎌田を盛りつぶそうと謀る場面(享保四年版説経では毒酒)、所領進呈を切りだし鎌田の油断を誘う場面、鎌田の二人の子の名を「みだいし(みだ石)」「みだわか(みだ若)」とする点、酌人の名を「ともやなき」とする点(享保四年版説経にはなし)などは、上掲先行作に既に見いだせ、こうした素材を『名所盃』がさらなる脚色を加えて採り込んでいることが知られる。その翻案の実態については阪口弘之氏に論がある。

ただし、『名所盃』が、これら先行作のいずれに、より多く依存しているかは必ずしも明確ではない。鎌田の討手を「吉七五郎」「浜田(はまだの)(はま田の)三郎」とする点が、舞曲や古浄瑠璃にはなく、説経にのみ見いだせる事実<sup>⑤</sup>(ただし、説経では、義朝の討手)、鎌田の最期描写が「きづかはしの我君や。御なごりおしの義朝公やと。是をさいこの詞にて」と、義朝への後慮で結ばれる点で、説経の「去にても、我君の御うんのすへの、いたはしやと、是をさいこのことは



にて」(元禄三年版)と似通う事実、さらには、孫のみだし・みだわかに追われて逃げまどう長田の様が、説経における、金王に追われる長田の姿と重なる点などに注目するなら、『名所盃』は説経の影響を最も濃く受けているかと推される。<sup>6)</sup>

鎌田の妻の描出に関しては、『平治物語』では、彼女が後追い自殺をしたことを記すにとどまるが、舞曲・説経等では形象化がより進んでいる。長田に招かれる鎌田に向かい「けふ此比のならいにて、おやは子をたばかれは、子は又おやに、たてをつく、」(元禄三年版説経)と用心を促し、鎌田の死を知るや、二人の子供を道連れに自害する様が詳述される。さらに『名所盃』では、彼女は「やどり木」という固有名を得て登場し、身を挺して鎌田を救おうとするが叶わず、自らも長田の手に懸かって果て、二人の遺児が仇を討とうと奮戦する展開となる。

如上、該作後半については、舞曲・説経等の系譜上に据える論が主だが、本説である『平治物語』利用の事実も認められる。筋の面では、朝長の負傷、頼朝が囚われの身となる点、金丸丸が帷子を求めて入浴中の義朝の元を離れた機を刺客が襲う手筈(ただし、古浄瑠璃もこの点は同じ)などは『平治物語』に則っており、また、本文面でも左掲のごとき撰取の事実が認められる。

① 嫡子悪源太義平は。ねり色のぎよれうのひた、れ白糸の物の具。二男中宮の大夫進朝長はくちばのひた、れ。

おもだかおどしの腹巻三男兵衛ノ佐頼朝十二歳。紫すそごのひた、れうぶぎぬと云重代の鎧。

〔名所盃〕 462-3)

嫡子悪源太義平は、生年十九歳、練色の魚綾の直垂に(略)次男中宮大夫進朝長は十六歳、朽葉のひた、れに、沢瀉とて、沢おどしにしたる重代のよろひに、(略)三男右兵衛佐頼朝は十三、紺の直垂に源太が産衣といふ鎧を着、

〔平治〕 422上20)

② 惣門の櫓の木を乗廻しく。〔名所盃〕 472-3)

大庭の椋の木のもとを追まはして、〔平治〕 426下6)

③ 海底の魚は深けれ共釣すべく。雲上の鳥は高けれ共射つべし。はかりがたきは人心

〔名所盃〕 490-4)

海底の魚も、天上の鳥も、高けれども射つべく、深けれども釣つべし。ひとり人の心のあひむかへる時、咫尺の間もはかる事あたはず。〔平治〕 445上8)

以上、該作が『保元物語』『平治物語』を本説とし、さらには舞曲・説経等の影響下にあることを改めて確認した。

こうした事実を踏まえた上で、以下、該作の特色を検討する。近世における史家・儒者による、保元の乱論評の眼目は二点ある。一点は、崇徳・後白河のいづれをより正当とみなすか、いま一点は、勅命により父為義を処刑した義朝の行為の是非である。

前者については、崇徳・後白河ともに非だが、いずれかといえは当今後白河をより正当と判断し、後者の場合、義朝の

行為を非として指弾するのが一般的な傾向である。この事実を念頭に置いて該作を見るに、後白河を「すぐれて日出たき聖主」、対する讃岐の王子を「酒宴にふけり色におぼれ。暴悪のふるまひ国王の器にあら」ざる人物と規定し、争乱の原因を、讃岐の王子が「梟悪の心やみがたく。二たび天下をくつがへし王位をうばひかやさん」として謀反を企てたことに求める。さすがに、実際の院号使用は憚るが、讃岐の王子が崇徳を指すことは明らかで、当今後白河は善、先帝讃岐の王子（崇徳の隠喩）は悪、との立場に立つ。

義朝については、苦慮しつつも結果的には、父為義から幼少の弟までを処刑し尽くした『保元物語』の酷薄な形象とは異なり、父の助命を嘆願し続ける孝子として描かれる。讃岐の王子追討の命を受けた義朝は、「所詮今度の討手は御めんをかうふり。父為義討死」して後に、出陣したいと願い出るが、許されない。合戦終結後は、為義を斬れとの勅命に「忠と孝とは車の両輪。一つもかけては人道にもはづれ候べし」と、官位・所領のすべてを抛って父の助命を乞う。結局、その懇請も叶わないが、その場合でも『保元物語』とは異なり、為義は義朝ではなく清盛の手にかかって討ち果たされる場面を仕組んで、義朝を父殺しの汚名から解放している。さらに、その後の義朝・清盛対立の原因を、清盛が為義を討つたことに求めるなど、一貫して孝を貫く人物として義朝は造型されている。

付言すれば、頼朝も又骨肉あい食む源氏の宿命を嘆じるき

わめて内省的な人物として形象化されている。為義の義朝・頼朝への慈しみ、義朝・頼朝の為義への思慕と、親縁の恩愛を描く該作は、骨肉鬭争の情景を展開しながら、内実は源氏一門の強い結束を語るものとなっている。平清盛をおとしめる現象とあい俟つ、源氏鬮頂の色彩の濃い作品である。

為朝に目を転じると、前半部は、忠・孝の相克に苦しむ義朝・頼朝ら、後半部は、父長田庄司と夫鎌田正清の狭間に懊惱するやどり木の描出が中心となる構想の中で、為朝は合戦の花としての存在にすぎず、脇役の一人に甘んじる。為朝の紹介及びその形姿描写はほぼ『保元物語』を踏まえる。すなわち、

生得ふてきの兵。力万人にすぐれせい兵のつよ弓。左のかひな右の腕より四寸ながく。矢づるを引ことならびなく。傍若無人のあふれ者。親兄の教訓をも用ひずもてあつかひ候故。十三の年より勘当しつくし方へ追下し候へば。九州を切なびけ十五の年迄八十余度の合戦致し。城をおとすと十五ヶ所。をのれとつくしの惣追捕使にをしなつて。

(467-10)

は、『保元物語』の

器量人にこえ、心飽まで剛にして、大力の強弓、矢続早の手聞なり。弓手のかひな、馬手に四寸のびて、矢づかを引事世に越たり。幼少より不敵にして、兄にも所ををかず、傍若無人なりしかば、身にそへて都にをきなばあしかりなんとて、父不孝して、十三のとしより鎮西の方へ追下すに、

(略) 十三の年の三月の末より、十五の年の十月まで、大事の軍をする事廿余度、城をおとす事数十ヶ処也。(略) 三年が間に九国を皆せめおとして、をのづから惣追捕使に推成て  
(356上7)

を下敷きとしているし、

七尺ゆたかの大男。大あらめにし<sup>10</sup>のがな物うつたる鎧。

五尺余りの大だちに熊の皮のしりざや入 (468-3)

は、

七尺計なる男の、(略) 大荒目の鎧、同獅子の金物打<sup>11</sup>たるをきるまゝに、三尺五寸の太刀に、熊の皮の尻ざや入  
(356下16)

に拠っている。これ以外の為朝描写にも『保元物語』の本文を利用したと目される部位が見いだされるが省略する。

また、合戦は、『保元物語』同様、為朝の奮戦を中心に展開しており、先述の如く、物語に見える伊藤兄弟射殺談など原拠に近い姿で取り込んでいる事例もあり、その勇武の形象は『保元物語』に立脚している。中でも圧巻は、為朝と悪源太義平との一騎討ちであろう。『保元物語』の英雄為朝と『平治物語』の英雄義平の、実際にはありえなかつた激しい渡り合いは一つの見せ場となっている。ただ、為朝に即して言えば、義平が対峙されるが故に、抜きんでた武人英雄としての為朝の印象が削がれる結果を生んでいる。これは、為朝を冠絶した武人として特立させる意識が作者にはさほどなかつたことを意味していよう。

為朝を理念面で支えるのは、父への孝心である。勘当され九州に放擲された為朝は「親の便を聞ざればそら吹風もなつかし」く思い、勘当を解かれた「嬉しさに舟もまだるく。三百余里のかちゞを三日にあゆみ登」る。為義の立場をおもんばかつて一度は讃岐の王子の殺害を図るが、為義の説得を受けて讃岐の王子への与力を決断し、合戦後は「平家を討こそかうかう」と、義朝との和睦を思うなど、その行動は孝を指針とする。すなわち、孝・勇武が為朝造型の理念といえる。それが『保元物語』の為朝像に胚胎すると見なすことに大きな誤りはなからうが、前に記したように源氏一門の恩愛を強調する該作にあつては、孝心が為朝固有の属性とはなっていないことも事実である。なお、為朝の去就が、父への孝にのみ収斂され、讃岐の王子への忠に向かわないのは、該作が、讃岐の王子を「梟悪の」帝王と規定していることによる。

(1) 『保元物語』との関係については、藤井乙男氏『近松門左衛門』(金港堂 明37)に、「上巻はほゞ『保元物語』に據り」との指摘がある。また、舞曲等からの取材については、飯野哲二氏『近松の芸術と人生』(賢文館 昭5)、原道生氏『中世芸能と近松』(シンポジウム日本文学『近松』学生社 昭51)などに言及がある。

(2) 諏訪春雄氏「近松浄瑠璃の『世界』と『趣向』」(『正本近松全集』別巻二 勉誠社 平8)に依れば、近松

が時代浄瑠璃に使用した世界は五十五種数えられ、中で『曾我物語』を世界とした作が九作（数え方により十作）と最も多く、『平家物語』は六作、『太平記』『義経記』はともに五作、『保元平治物語』を世界とするのは該作のみという。ただし、世界の認定にはいくほどこかの揺れが生じるようで、大橋正叔氏「近松門左衛門と『世界』」（『近松研究の今日』和泉書院 平7）には、「近松作と確定されて」いる七十一一点中、曾我物十点、源平軍物八点、義経記物七点、太平記物四点とある。

- (3) 注(1)の論。はやく黒木勘蔵氏（『浄瑠璃史』青磁社 昭18）は、「正本を見ないから断言は出来ないが、（略）『鎌田兵衛名所盃』は古浄瑠璃『かまだ』（寛文七）  
（年刊）」に、（略）必ずや深い関係を有するであらう。」と推測されている。これら鎌田謀殺を描く舞曲・説経・古浄瑠璃の相互関係については、水谷不倒氏『新修絵入浄瑠璃史』以来、議論の集中するところだが、詳しく論じたものに、須田悦生氏「舞曲・説経・古浄瑠璃のあいだ―『鎌田』を例にして―」（『阿部源藏先生退官記念国語学国文学論文集』昭54）、阪口弘之氏「寛永期の浄瑠璃―『鎌田』の周辺」（『浄瑠璃の世界』世界思想社 平4）などがある。

- (4) 「近松の時代浄瑠璃の翻案方法―場面形象を中心にして―」（『谷山茂教授退職記念国語国文学論集』塙書房

昭47）、「近松の素材翻案におけるヒント」（『文学史研究』14 昭48・七）

- (5) 『平治物語』の流布本や金刀本にも義朝の討手に「橘七五郎」「浜田三郎」と見えるが、この場合『平治物語』との直接関係を考える必要はあるまい。

- (6) ただし、管見に及んだ作品は、『鎌田』（須田悦生氏『幸若舞曲研究』第二卷所収）・元禄三年版及び享保四年版『鎌田兵衛正清』（横山重氏『説経正本集』第三所収）、『待賢門平氏合戦』（横山重氏『古浄瑠璃正本集』第一所収）にとどまり、古浄瑠璃『鎌田』『平治合戦<sup>付</sup>鎌田最後』は未見。

- (7) 拙稿（概説と翻刻）（東北大学附  
属図書館蔵）『読史筆録保元物語』（『名古屋大学国語国文学』67 平2・十二）を参照された  
い。

- (8) 近松における天皇観を論じたものに、木谷蓬吟氏『近松の天皇劇』（淡清堂出版 昭22）、森山重雄氏『近松の天皇劇』（三一書房 昭56）があるが、この点について特に言及するところはない。

- (9) 近松の時代物における孝の趣向を四分類される明眞淑氏「近松の浄瑠璃における『孝』の様相」（『伝統と創造』勉誠社 平8）は、該曲を、「孝」が『忠』と葛藤することによって、作品が展開し大団円を迎える作品群』に入れ、かつ、その特徴を、「孝」と『忠』とが葛藤して、『忠』を果たすことによって大団円を

迎えている。葛藤の解消は、時節を待って源氏が平家を討つことであると、近松は義朝の弟為朝をして語らせている。」と説く。また、親子像の観点から近松作品八十一作を分類・整理された片岡徳雄氏「近松浄瑠璃に現われた親子像」(「広島大学教育学部紀要」第一部第35号 昭61・十二)は、該作を「多重円型、板ばさみもの」に収める。

(10) 朝日新聞社版の頭注は「しのがな物」を『保元物語』に見える「獅子の金物」を誤ったものとする。従うべきかと思うが、より正確に言えば、当該部『保元物語』版本中、古活字本及び寛永元年片仮名交じり整版本には「獅子の金物」(漢字・仮名に係わる表記の相違は無視)とあるが、寛永三年平仮名交じり版以降の整版本には「しの金物」(元禄十五年版は「しのがなもの」と見える。このことより、上記事実は『名所盃』が『保元物語』の本文を誤引したというよりは、『名所盃』の拠った『保元物語』が寛永三年版以降の整版本だったことを示す徴と解すべきだろう。

#### 五、鎮西八郎唐土船

紀海音作。『紀海音全集』第五卷(清文堂出版 昭53 本文引用は該書による)の解説に依れば、享保五年(一七二〇)正月上演。

浄瑠璃作者としての海音は、豊竹座の座付作者として、竹

本座に拠る近松門左衛門と筆を競った人物である。ただし、近代以降における評価・知名度は近松に遠く及ばない。祐田善雄氏は、海音の作風の展開を、模倣翻案時代・飛躍準備時代・独創時代に三分、享保三年(一七二八)以降を独創時代とされるから、享保五年上演の該作は、海音にとって円熟期の作品と位置づけられる。もともと、「近世化の成果を挙げえた」と評価される世話物に対し、時代物については「近世化された彼独自のものを出しえず、時代物全般としては海音の努力は失敗に終わったとみななければならない。」との手厳しい評価も見られる<sup>②</sup>。海音の時代物に対する低い評価は、はやく黒木勘藏氏の断じられるところではある<sup>③</sup>。

以上、通念をなぞった上で、該作の梗概を記す。崇徳と後白河は共に内大臣宗輔の娘なでしこ姫に懸想し、それぞれの使者に立った為朝と義朝は対立、一触即発の事態となるが、なでしこ姫の侍女鈴虫の機転で事なきを得る。崇徳は兵を召集し、蹶起を企てるが、平清盛に機先を制せられて敗北。為朝は、崇徳の皇子重仁親王を奉じて逃走するが、四国毘飛羅屋にて正体を見破られ、日本脱出を図る。義朝は、合戦の勲賞に、鈴虫を給わる一方で、敵将となった父為義の斬首を命じられる。為義の妾のこゆるぎは、義朝邸に二人の幼児を伴い助命を懇願、これを哀れんだ鈴虫は幼児の養母になることを申し出る。後顧の憂いのなくなった為義は、鈴虫に「ときわ」の名を贈り、従容と死につく。海外に逃れた重仁・為朝主従は、流れ女の小ざつま(実は琉球大将でいもうるの妻も

うきん)に導かれ女護が島に渡る。そこへ琉球軍が攻め寄せ  
るが、為朝はそれを蹴散らし、大将を討とうとして重仁に制  
止される。大将は重仁の仁徳に感じて帰降し、重仁は琉球王  
女の桃花夫人と結婚、為朝は將軍となる。

以上が梗概である。なでしこ姫をめぐる崇徳・後白河の確  
執、為義の幼児助命に係わる展開、重仁と為朝の渡琉など、  
多大の脚色を孕みながらも、保元の乱についての認識は、『保  
元物語』にのっとる。崇徳・後白河対立の因を鳥羽の後美福  
門院の「さかしら」に求める点、崇徳蹶起の因を「其身の器  
量に高慢し御舎兄関白忠通公の。権威をそねみいきどほり邪  
意をはさん」だ左大臣頼長の甘言に求める点などからそれは  
知られる。また、経緯は異なるが、為義が義朝のもとで処刑  
される点も物語の筋を襲っている。この他にも、筋立てや文  
辞に物語の利用が見られる。例を挙げると、為朝が夜討ちを  
進言し、これを頼長が退けるところは、場面のみならず本文  
面でも物語に大きく依存している。頼長の言

なかんづく南都の衆徒。吉野十津川に名を得たる。指矢  
三町遠矢八町と云者抔未明迄にははせ付べし。其上院司北  
面等違背に及ばん者の首。三つ四つ刃る物ならばなどはか  
勢の付ざらん。吾人当千の為朝もんこきびしくさし堅め。  
明日昼軍の用意せよ  
(177-6)

は

南都の衆徒をめさる、事あり。興福寺の信実・玄実等、  
吉野・十津川の指矢三町・遠矢八町と云者どもを召具して

(略) 暁はへまいるべし。かれらを待調て合戦をばいたす  
べし。又明日、院司の公卿・殿上人を催さんに、参ぜざら  
ん者共をば死罪におこなふべし。首をはぬる事兩三人に及  
ば、残りはなどか参らざるべき。  
(357下4)

によつたものであるし、為朝の言

夜討に過たるためしなし。思ひがけなく逆よせして三方  
に放火を上げ、一方をさ、へなば備へも立ぬ官軍共。火を  
逃んとする者は矢の下にいつふせん。矢先に恐る、輩は煙  
の中にさけばんは一刃に血ぬらずして(略) 行幸を此御所  
へうつしおしこめ。親王を御位に即奉るはけふの内  
(177-11)

も、やはり

夜討にしく事侍らず。然れば只今高松殿に押よせ、三方  
に火をかけ、一方にてさ、へ候はんに、火をのがれん者は  
矢をまぬかるべからず、矢をおそれむ者は、火をのがるべ  
からず。(略) 行幸を此御所へなし奉り、君を御位につけ  
まいらせん事、掌を返すがごとくに候べし。  
(357上9)

をもととしている。これ以外にも為義の経歴等その他に文辞  
の利用例を見いだすが、詳細は省く。

物語を踏まえつつ独自の展開を見せる場面も見受けられ  
る。該作第三段は、為義・義朝・こゆるぎ・金丸・鈴虫の  
絡みを描き、幼児助命へと決着を見る。この筋立ては、為義  
の懇願も空しく幼い四人の遺児が処刑され、その母も入水す  
るといふ物語の描く悲劇を、救いある方向に仕立て直したも

のである。また、為朝と金王丸の間で「家伝の太刀」「産衣」の争奪がなされ、「産衣」の代替に「鵜の丸」を与えられて為朝が引き下がる趣向は、為義が重代の名甲「源太が初衣と膝丸」を義朝に遣わした旨の物語の記述、及び、崇徳が為義に「鵜丸」を下賜した旨の記述を手懸かりに案出されたものである。結局、該作も、保元の乱にかかわる部位については、認識・筋立て・文辞等の面で物語に多分に負っていることが確認される。

次いで、王権・義朝観・為朝形象の問題に移る。崇徳・後白河の抗争については、「親々鋒盾嫡庶統を争ふ。本朝風俗の類敗日域教化の乱壊」「保元はじめの年上兄弟の礼うすく。下同性の義をなみしよしなき御国あらそひ」との記述より見て、兩人ともに非とするようである。崇徳に対しては常套句ながら、その治世を「十八年の春秋は国とみ民もやすらけく」と讃えもし、「当今新院両御所の。御心より出し事。何れにお味方申せばとて朝敵といふ悪名を。蒙る程の料はなし。」との崇徳方の為義の言い分もあるものの、蹶起という行為に對しては、頼長や平馬の介ら「佞者のす、むあま口に」崇徳が「御身の毒もわきまへず」のつたものと批判的である。従って、いずれかといえば、当今後白河是認の立場と認識される。

義朝についてはどうか。該作は、義朝の采配による為義処刑という物語の記述（史実）を踏襲するため、為義斬首へと追い込まれてゆく義朝の苦悩が前面に押し出され、それが一つの見せ場ともなっている。「子をすつる。藪はあれ共親す

つる。ためしは是や源の清きながれの名をにごす」との文詞が書き込まれるものの、義朝を父殺しと指弾する姿勢は意外に希薄で、この事件を義朝及び源氏の悲劇と捉える色合いが濃い。

為朝はいかに描かれているか。『鎮西八郎唐土船』の題名から受ける予想とは異なり、彼は主人公的位置にはない。該作の主旨は、崇徳の皇子重仁の境涯であり、また、為義処刑に係わる源氏の悲劇といえる。この構想の中で、為朝は重仁の忠臣としての役割を演じるが、その形象は、武勇と忠を主要素とする。

彼は登場に際しその風貌を次のように描き込まれる。

ハツトこたへもどさ声につくしそだちの角まへがみ。其たけ七尺有余にて筋ほねあれてふつ、かに。鬨羽が髭はもたね共張飛が眼か、やきて。あゆめば大地もゆさく／＼とゆさめき出たる顔かたち。鬼神より猶おそろしき鎮西八郎為朝

平馬の介を地面に打ち付ける、四国毘飛羅屋にて捕手を追い散らす、果ては琉球軍との戦いに船一艘を覆すなど、該作はその剛勇の様を描いて余すところがない。ただ、『鎌田兵衛名所盃』の為朝に義平という対抗者が配されるのと同様、該作においても、為朝と互角に渡り合う金王丸の存在があり、その分、為朝の勇武の印象が削がれる憾みがある。

また、その勇武は粗暴の色合いを多分に含む。「あら気をこのむあら男」の為朝は、無体にもなでしこ姫を連れ帰れ

と頼長に命じられて、「むたいに輿へ打のせて。ひつたて、来る事は。為朝が好物。」と「につたりと笑」うし、義朝や金丸との対立には激情を迸らせる。畢竟、彼は分別に欠ける「血気勇者」である。なでしこ姫が、後白河に靡いたと知るや、「たとひ姫君をまつふたつに切り。半分宛は取とても。まんそくには渡さじ」と激昂するが、鈴虫に「背をほとくた、かれ」てすかされると、「目をほそめ身をちぢめ」る幼さを見せる。およそ駆け引きや深謀には縁遠い。風情にも疎く、崇徳の詠草をなでしこ姫に届けるよう命じられると「しめつたらしい御使。ゆかぬうちから氣うつしてらうがいやみに成そふな」と、洪面を作る。従って、その使者ぶりも「新院の御所。なでしこ姫を恋わび給ひ。某院宣の御使として罷越す。御返歌あれと大をん上立はたかつて（院の詠を）さし出」す無粋さであり、そうした点を、鈴虫に「色をしらねば情といふ物しりませぬ」とあしらわれもする（もつとも、この点、後半の流浪場面に至ると、かなり世馴れた姿へと変貌する。その理由は、恐らく、重仁の純情を強調することにあると思われるが、前半と後半の為朝形象に違和がある事実は否めない）。対する義朝が「文あり武ありなさけあり」、「武芸の外に色香有みやま木ならぬ男」と全人的な評価をされるのに比べ、為朝の場合かなり偏った造型がなされている。

結局、該作の為朝は、粗暴とも言える勇武を持ち、直情径行で分別に欠け、また色事に疎いという設定をされていると

いえるが、そうした為朝を支える理念が忠である。為義から重仁を奉じて落ちるよう命じられた為朝は「いや／＼是は不了簡。院を捨父を捨。かく戦場を身に受矢の一本も射かけず。御供せよとは思ひもよらずとにがり切たる」顔をする。しかし、崇徳より「汝は又朕に替りつぼめる花の重仁を我子と思ひ連落て。ひらくる時を待ならば蘇迷慮の頂より。いくばく増る忠勤ぞ」と諭されるや、「もつたいなや耳がなや若年血気の某に空恐敷勅を蒙りいかでか背奉らん」と「せきくる涙を吞込」む。また、琉球軍の大将を討とうとし、重仁に制せられると、「主を敬ふ礼義」を見せ、ただちに従う。忠義を核とする故に、粗暴とも見える勇武は容認される。

なお、為朝渡琉については、十六世紀前半に成立したとされる『幻雲文集』（鶴翁字銘并序）を初見とする由だが、該作は、慶安二年（一六四九）に刊行された『琉球神道記』より想を得ている。そのことは、本文中に「袋中法師が神道記に琉球竜宮音同じ。則同所成べし」とあることより知られる。

近松作品に比しての海音作品の特色として「哀れという感情に訴える段階を殆んど経ないで筋を展開させ」る「一種の理智的作劇手法」<sup>3)</sup>の見られることが言われる。試みに、小稿に扱った近松『名所盃』と海音『唐土船』を比べ見るに、『唐土船』においても、為義の幼児助命をめぐる母こゆるぎを中心にした激しい情感の迸りが描き込まれており、必ずしも「人間性をも義理づくめで描」いているとは言い切れない。ただ、



義朝等の忠・孝相克の苦惱、やどり木の孝・貞のはざまの懊悩などを眼目として展開する『名所盃』に比せば『唐土船』には情に訴える要素が希薄であるとは言えようか。

- (1) 「紀海音の著作年代考證とその作品傾向(上)(下)」  
 「国語国文」 昭11・七、八。なお、世話物に限っての完成期については、横山正氏『近世演劇論叢』(清文堂出版 昭51)が、正徳五年(一七一五)秋以後に訂正、大橋正叔氏「海音」(『元禄文学の開化Ⅲ』勉誠社 平5)もこれに同じる。

- (2) 注(1)の横山氏著書。なお、海音の時代浄瑠璃については、諏訪春雄氏『近世戯曲史序説』(白水社 昭61)中に分析がある。

- (3) 『近世演劇考説』(六合館 昭4)

- (4) 横山學氏「琉球物の流行と近世の琉球学」(『季刊文学』岩波書店 平10・七)

- (5) 注(1)の横山氏著書。

#### 六、鎮西八郎射往来

延享四年(一七四七)二月、難波三蔵の作。本文は、延享四年<sup>丁卯</sup>如月廿一日の刊記を持つ大坂天満屋玉水源二郎板の東京芸術大学附属図書館蔵本(原本未見。国文研蔵マイクロ資料191-5)に依る。

まず梗概を記す。盗賊の月本左衛門は、渋谷金王正俊と名

を改めて源為義の家来となる。合戦の敗北を予知した為義は、行方知れずとなっている八男を捜しだし、長男義朝と「兄弟の中睦じく源氏の姓を守立」てるよう伝えよと金王に命じる。保元の乱が起り、為義は討死するが、金王は、為義の首と源家重代の兜八龍を敵の川上次郎から奪い取って逃亡する。一方、金王の女房である遊女道芝は川上次郎に捕らえられるところを、近江の遊民、臥朝に救われる。しかし、臥朝は金王の母を人質にとり、道芝に迫る。臥朝の女房お弓は嫉妬より刃傷に及ぼうとするが、それを制した臥朝の母の柵は、臥朝が実子ではなく、為義の八男であるとあかす。自らの出生を知った臥朝はこれまでの自堕落を悔い、名を鎮西八郎為朝と改め、父の仇討ちを胸に、軍勢召集のため九州に下る。義朝の臣佐々木源蔵秀義は、金王の妹の小蘭と祝言を挙げ、潜伏していた金王を逃す。金王の件で平判官実俊の詮議を受ける道芝の窮地を救った義朝は、折しも現れた金王を捕らえる。そこに為朝が義朝を討たんと押し寄せ、あわやとなるが、道芝が身を犠牲にして為朝と義朝の不和を解く。為朝は金王を義朝に託して流離の旅に出、琉球に渡って国王となる。

右の梗概から明らかのように、その内容は『保元物語』のつとること薄く、ほぼすべてを創作とする。ただし、登場人物については、『保元物語』『平治物語』からの借用が認められる。敵役の平判官実俊は保元の乱参戦の後白河方の武将として『保元物語』に見え、同じく悪役の兵藤内は、『平治

物語』中に臆病武者として登場する。佐々木源蔵秀義は、為義の猶子で、保元・平治の乱に参戦した佐々木源三秀義をモデルにしたものだろう。

該作は、保元の乱勃発寸前の状況から始発し、後白河の治世を「聖代」とし、乱を崇徳の遺恨による謀反と規定する。ただし、後白河・崇徳ともに具体的な形象化はなされておらず、存在感は希薄である。「父の敵ハ後白河責ほろぼすもやすけれど朝敵の名を取なとある父のゆいげん恐れあり」との為朝の言が端的に示すように、後白河をも必ずしもよしとはしないが、原則としては、現体制を是認しこれに背くを「朝敵」とみなして不義とする観念が読みとられる。ただし国争いという構図に作者の関心はない。

義朝においては、やはり忠・孝の相克に苦しむ姿が焦点となるが、該作では、為義は戦場において敵の河上次郎に討たれる設定を取ることで、義朝は父殺しの難題から解放たれている。父と矛を交えること、父の命を救えなかつたことが義朝を苦しめるが、それも親子の敵対が「源氏の家名を絶さじ」との為義の深慮に発すると説明されるに至っては、もはや義朝を非難する理由はない。該作は義朝をきわめて好意的に描く。

狂言回しの役割をもつて筋を展開させてゆくのは金王である。この金王が、『平治物語』に登場する金王丸に淵源を発することは論を待たない。『平治物語』において、金王丸は、主君義朝が長田忠宗（忠致）に謀殺された際、奮戦して帰洛

し、常業に義朝の最期を報告した後、出家したとされる人物で、『平治物語』の成立に係わりを持つ存在として議論が多い<sup>①</sup>。彼はまた、義朝腹心の家来として、舞曲『鎌田』・説経『鎌田兵衛正清』・古浄瑠璃『待賢門平氏合戦』などにその剛勇ぶりが活写され、続く『鎌田兵衛名所盃』や『鎮西八郎唐土船』にも活躍が描き込まれるが、該作に至って舞台の正面に躍り出る。金王を、佐々木源蔵の妻小蘭の兄とする該作の設定は、恐らくは系図類が金王を渋谷重国の近親と伝える事実及び佐々木源三秀義が渋谷重国の婿であった事実を元に案出されたものと思われる<sup>②</sup>。また、第四段末に近い一文「是よりながく源の義朝公に付したがふ渋谷の金王正俊を末に土佐坊正俊と姿をかへし」に注目するなら、該作は、金王が義朝の家臣となるまでの経緯を叙したものとみなされ、その意味では『平治物語』世界の前日譚と捉えられる。また、「末に土佐坊正俊と姿をかへし」との記述は、さらに彼を、頼朝の命を受け義経暗殺を凶って失敗した土佐坊昌俊に付会するものである<sup>③</sup>。

為義は、保元の乱を前に金王に付託をする。その付託とは、生後間もなく「追失」つた八男（為朝）を捜しだし、義朝と争う愚を止めさせようとするものである。金王は、主君為義から託された使命を全うするためにのみ、その後の人生を生きる。行為のすべてが為朝を説得して源家の結束を図るといふ目的に求心される点を重視すれば、該作の主人公は確かに為朝と言える。しかし、主たる筋は、金王とその縁者の織り

なす人間模様である。金王の為義への忠義を核として、道芝の金王への一途な貞節、金王の妹小蘭と佐々木源蔵秀義との恋、金王の父兵作と離縁した女房（金王・小蘭の母）との葛藤など、金王一家の命運に沿って筋が展開してゆく。

では、該作において、為朝はいかなる性格を付与されているか。まず、状況設定が本説の『保元物語』と大きく異なるのは、為朝が保元の乱に参戦していない点である。保元の乱の時点で、為義にとって為朝は消息不明であり、為朝も又自らの出自を知らない。為朝のあずかり知らないところで合戦は起こり、そして為義は討ち死にする。これは、保元の乱Ⅱ為朝の活躍舞台、という常識を打ち破る思い切った仮構である。為朝は自らの出自をなぜ知らないのか。それは、彼が「弓手の腕馬手に勝れて長き故いぶせきかたわ」として生まれたため、父為義に疎まれ、乳母である柵の「古郷」「鎮西」において、人知れず育てられたためである。「幼少より不敵にして、兄にも所ををかず、傍若無人なりしかば、身にそへて都にをきなばあしかりなんと」為義が思ったためとする『保元物語』とは、鎮西行の理由が異なる。また、左手が右手より四寸長いという為朝の身体的な特徴は、『保元物語』以来、為朝が天賦の弓取りであることを雄弁に物語る誇らかな表徴として語られてきた。しかるに、該作では負のイメージをもつて扱われている点特異と言える。

為朝は、自らの素性を知らぬ遊民として生い育ち、道芝に関係を迫り、女房お弓の前で情交に及ぼうとする「もぎどぶ」

を見せる。が、ひとたび為義の八男であると知るや「仇に暮せし」過去を悔い、父の仇討ちに執念を燃やす意志の人に変貌する。

そうした為朝像を構築する主要素はやはり並はずれた武勇だろう。常套表現ながら、登場に際しては「器量骨柄人に越ぬと紹介され、その剛勇の様は、近江の陋屋における追捕者との鬪乱、また義朝との対決、更には琉球での奮戦に活写される。「末世にいたつてゑぞ松前鬼住嶋の果迄も絵図にうつして疫病の守りとするも理りなり」との一文は、為朝の図像を以て痘瘡封じのまじないとした江戸期の習俗への言及である。これより後の作品だが、『椿説弓張月』（後篇卷之二第九回）中、為朝が八丈島海域において痘鬼を叱責する場面のあることはよく知られている。疫神をもひしぐ武神為朝の定着が読みとられる。

為朝を形づくるさらなる要素、それは直情径行の気質である。「よきもあしきも一心に凝かたま」る、「一途にはやるわんぱく太郎」、「思ひそあたる一念ハひるがへさぬ御気質」と、その一途な性向が強調される。道芝への横道の恋に迷うかと思えば、それを一瞬に断念し、義朝への復讐に身を燃やす。しかし、義朝の釈明に納得するやたちまちに「義朝公を恨しハ我慢心」と翻る。その気質は愚直なまでに単純明快であり、対する義朝が忠・孝の相克に苦しむ慎重で思慮深い人物として描かれるのと対照の妙をなす。

さらなる要素として無頼性が加わる。臥朝<sup>(4)</sup>と称していた頃の遊民生活がそれであり、義朝と和解した後は、「我ハけふよりひとり武者」と「王土に恨を指はさ」んで日本を去り、琉球に渡る。結果としては琉球王になるが、それも、自らの野望に発するものではない。「琉球の王城遠き片辺鳥も通ハぬ嶋山の巖のかたに寛々とあら木の弓に身をゆだね眠を結」んでいたのを、「日本から鎮西八郎といふ大兵が渡つたれば後二ハ国の妨故押寄て討て取」んと攻められた結果、「ヤア面白し望所の琉球国只一もみに打ちやぶり我此国の主とならん」と思い立つのである。「我源家の八男と生れ其身不肖にして父母に仕へることあらず仕ふべき君なければまして住べき国もなく」との述懐が、一つの枠の中に収まりきれない為朝の本質を言い得ている。

為朝渡琉については、既に『鎮西八郎唐土船』が大きく取り扱うことは述べた。為朝を語る時、渡琉伝説は無視できないまでに成長・普及していたのだろう。

該作の場合、状況設定などが本説である『保元物語』から大きく飛躍しており、為朝像にも物語の影響が伺えないかのごとくみえる。しかし、彼の属性を、勇武・孝心・直情径行・無頼と指折る時、本質においては、『保元物語』以来の伝統的な為朝観の支配していることに改めて気付く。

(1) 室木弥太郎氏『前語り物(舞・説経 古浄瑠璃)の研究』(風間書房 昭56)、安部元雄氏『軍記物の原像とその展開』

第二章第五節(桜楓社 昭51)、日下力氏『平治物語の成立と展開』(汲古書院 平9)など。

(2) これら世系については、新古典大系本付録人物一覧(秀義の項)及び注(1)の日下氏著書後篇第五章第三節などに手際よくまとめられている。

(3) 金王丸を土佐坊の前身とする説は、『平家物語』八坂本・如白本・南部本、幸若舞曲『堀川夜討』、古浄瑠璃『待賢門平氏合戦』、『江戸名所記』、『金王八幡神社略記』等に見えることが指摘されており、金王丸・土佐坊同人説がかなり広く普及していたことが分かる。『平家物語研究事典』「昌俊」の項(加美宏氏)、注(1)の日下氏著書後篇第五章第三節、須田悦生氏注釈「鎌田」(『幸若舞曲研究』第二巻 三弥井書店 昭56)などを参照されたい。

(4) 臥朝の名は、為朝が己の貴種たるを知らずにいた雌伏時代を指す隠喩であろう。

#### 七、崇徳院讃岐伝記

二代竹田出雲、近松半二等五人の合作。宝暦六年(一七五六)初演。本文は、文教女子大学図書館蔵本(原本未見。国文研蔵マイクログラフ資料8247)による。

富家禅閣忠実の暴悪により退位を余儀なくされた崇徳は合戦に敗れ、讃岐に配流となる。義朝は敗将となった父為義の命を、郎等鎌田正清の父を身代わりにして救うが、後に為義

は自害する。崇徳の皇子千里の宮は四国へ逃れ、浮寝の姫も宮を慕って跡を追うが、兩人様々の苦難に遭う。讃岐にある崇徳は、五戒を破って魔界に入り、押し寄せた敵を殲滅し、金比羅権現に変生する。為朝は、千葉ノ助常胤と共に千里の宮を擁して、非道の忠実を討ち取ろうとするが、苦戦を強いられる。しかし、遂には神変の加護を得て目的を達することができた。

以上が該作のごく荒い筋である。これを骨子として、千葉ノ助とその隠し妻の賤花や女房のおりせ、おりせの父五村甚平らの織りなすドラマ、及び讃岐の在庁高遠の後室である湊と娘の待夜、甥の八栗銅内を巡る話その他諸々が複雑に絡みあって進行する。『浄瑠璃作品要説へ3』近松半二篇（国立劇場 昭59）に詳しい筋が掲げられている。該作については、「忠義そのものをも暗に否定して、自然なる人間性こそ、あらゆる慣行、制度的道德律の上に置かれるべきである事を主張する」「まぐれ当り」の傑作と評価される堂本正樹氏の見解がある。また、その構想・筋立て等については、森山重雄氏に丁寧な分析があり、『保元物語』取り込みの様態についても具体的に解き明かされているので、小稿では、崇徳・後白河、義朝及び為朝の問題に限って述べたい。

保元の乱を材とするにあたっての該作の特色は、藤原忠実を最大の悪形とするところにある。史上の人物としての忠実は、関白忠通と左大臣頼長の父で、保元当時、出家の身ながら隠然たる権勢を有する存在だった。保元の乱では、頼長支

援の立場から崇徳荷担の動きを見せたが、乱後は後白河体制に帰順し、しばし軟禁状態にあった。説話の世界では、『富家語』『中外抄』の話者として名高い。該作では、史実及び物語とは大きく異なり、恣意により、崇徳の退位・後白河の登祚を断行する倨傲の人として登場する。これに伴い、後白河は「乳の味忘れ」ぬ「まだ子供上り」（実際は、保元元年の時点で三十歳）で、即位後も、兄崇徳に政を委譲する恭謙の人と設定される。そうした状況下「禁中の権を取四海を蠅虫と見下す我慢」の忠実は「天下の政道某が執行へば今日よりの天皇ハ此禅閣百官我を拜せよ」と強権を敷く無法ぶりである。従って、保元の乱を「天下の為君（＝後白河）の為」に崇徳が逆臣忠実を斥けんとした合戦と規定することで、崇徳と後白河の国争いという史実をすり抜ける。<sup>3</sup>

義朝については如何か。この点は、既に前掲の堂本及び森山論に尽くされているが、行文の必要上わたくしなりに再述する。梗概で略記したように、義朝は平長盛に強いられて為義を討つが、それは鎌田の父左衛門を身替わりとしたものだった。この事は長く秘されるが、梅津庄司義法（常磐の父）が義朝を父殺しと責める場面であかさされ、為義はその場で割腹、鎌田に介錯を求めた。該作は、鎌田の父を為義の身替わりとすることで、義朝を父殺しの汚名から救う。<sup>4</sup>しかし、鎌田にとつては、主君の身替わりという大義からとはいえ、自らの手で父を討ったわけで、その因を作ったのが為義である点で、為義は父の敵ともいえる。従って、鎌田が為義を介錯

する、すなわち為義の首を斬ることは、父の仇を討つことになる。その際、為義は鎌田を勘当し、主従の契約を解いているので、鎌田の行為は主殺しには当たらない。鎌田は為義を斬ることで忠・孝両義をまっとうできる。これが自害を図った為義の論理である。以上の筋立てには、鎌田が義朝の命を受けて為義を斬る『保元物語』の記述に強く規制されつつも、義朝・鎌田を父殺し・主殺しの汚名から解き放とうとする苦心が窺われる。この筋立ての故に、義朝は孝の道にもとらぬ人物として、忠実討伐のために為朝と力を合わせる事が可能となる。

結局のところ、該作は、皇位争い・父殺しといった重い命題を巧みにかいくぐり、思想性・政治性の問題から身をかかわすことに一応の成功を得ているといえよう。

次に為朝の形象を見る。これについては、他作品と本質的に変わるところはなく、勇武・忠・孝を主要素とする。勇武においては、弓は「十人張」、矢束は「三十束」と誇張され、「日本不双類なき神変備ハる勇猛力古今独歩の弓勢」による奮戦の様が随所に描かれる。また、忠孝については、勘当中の身を恐れ「おくれを見せぬ八郎も親に逢てハ後堂身を忍ふ」「いぢらし」さを見せるし、勘当を解かれると、「ハア有かたし恭しと額を土にすり付て」喜ぶ。為義が討たれたと聞くと、「父の最期のお顔も拝せぬ事の口惜さ肝ハ八つ裂五たいをバ輔に踏る思ひぞ」と血の涙を流す。しかし、父の敵と狙う義朝に対し、千里の宮の味方となり、忠実を討つ心がけ

なら和解してもよいと譲歩を示し、千里の宮を皇位に即けるために、千葉ノ助と力を尽くす。

こうした勇武・忠・孝に知略・深謀が加わる。常磐・桜木姉妹に自らの強弓を引かせ、力を合わせるこの大切さを説く場面、或いは千里の宮を匿おうとする湊の心底を探る為朝を「弓勢計か智謀迄」勝れていると評する場面等にそうした意図が見られる。これにさらに、恋には疎い無骨さが加わる。許嫁の桜木に対し為朝は「弓矢軍術手練の外なまぬるい事大嫌ひ（略）傍へ寄たら踏殺す」とにべもないし、筋の後半に至っても「うぬ又そばへうせまいぞ三年が間ハ大精進く」と、近くに寄せることもしない。以上が、該作の為朝像を構築する諸要素である。

なお、他の登場人物について付言すると、ごろたの金蔵が、義朝に取り立てられて、名を金丸正俊と改め、後に渋谷土佐坊正俊となったとするのは、『鎮西八郎唐土船』において触れたように、金丸丸伝承を受けた叙述である。

- (1) 『崇徳院讃岐伝記』二段目に於ける民衆感情の表現とその方法」〔詩林浜涸〕4 昭37・三三  
 (2) 「聖と卑の暗喩と鏝の劇『崇徳院讃岐伝記』」〔浄瑠璃の小宇宙』三一書房 昭58)

(3) ただ、そうになると、崇徳の皇子千里の宮の即位を願う為朝の努力は、実質的には後白河の追い落としを意味し、その行為には大義がないことになる。その意味

では、構想上の破綻と言えなくもない。

(4) ただし、別の箇所で、「義理にせまりし親の首現か夢か夢の世に報ひハ野間の内海にて長田が為に成果る後の哀を今爰に打連てこそ帰らるゝ」と記し、三年後の平治の乱における義朝の横死を父殺しの報いと述べるのは、従来の認識に迂闊に従ったための失錯と思われる。

#### 八、まとめ

以上、古浄瑠璃から宝暦六年の『崇徳院讃岐伝記』に至る七作を通覧した。いずれも、程度の差はあれ、『保元物語』(『平治物語』)に想や材を仰ぎ、本文を撰取・利用している事実が確かめられた。古浄瑠璃にはさほど顕著でないが、後の時代浄瑠璃の場合、各々独自の趣向を凝らしつつも、保元の乱を基調とするところに共通性が見られる。それゆえに、保元の乱及びそれに深く係わる人物を如何に描いているかが、一つの関心事となる。崇徳・後白河の当否に注目した場合、『鎌田兵衛名所盃』は、新院讃岐の王子(崇徳の隠喩)を暴悪の主と設定し、後白河是認の立場を取る。『鎮西八郎唐土船』は、両者共に非とするが、いずれかといえば後白河寄りの立場を取る。『鎮西八郎射往来』もまた後白河を是とする。『崇徳院讃岐伝記』は、保元の乱の因を忠実の僭上に求める大胆な仮構によって、皇位争いの問題から逃れる。以上、通覧するに、諸作、大体において後白河をより正当とするが、この

立場は当時の大方の史論の見解と合致している。

次に、義朝の場合は如何か。諸作、彼を父殺しの汚名から解放すべく工夫を加えている。工夫の一つは、為義を義朝以外の人物(清盛あるいは川上次郎)によって討たせるか、あるいは自害させるという虚構をもって、為義が義朝によって処刑された史実(『保元物語』の記述)を封じこめる方法であり、『鎌田兵衛名所盃』『鎮西八郎射往来』『崇徳院讃岐伝記』に見られる。いま一つの工夫は、史実を隠蔽せず逆手にとって、為義を斬らざるを得ない事態に追い込まれてゆく義朝の苦衷をあぶりだし、彼を悲劇の主仕立て上げる手法であり、『鎮西八郎唐土船』に見られる。いずれの場合も、義朝に同情的な筆致が見られ、彼を知・勇に優れた名将として美化する傾向が大である。世上における源氏最良の致すところではあるが、近世期の多くの史論が義朝を厳しく糾弾するのは様相を異にしている。

最後に、為朝形象についてまとめると、その最大の造型要素はやはり冠絶する勇武だろう。それに無粋・武骨が加わる。しかも、その勇武は、分別に欠ける直情径行の要素を伴う場合が少なくない。この点で、その形象は、「いにしへよりいまにいたるまで、此為朝ほどの血気の勇者なしとぞ諸人申ける。」とする流布本『保元物語』の認識の延長線上にあると言えようが、こうした、ややもすれば、粗暴・無法の誹りを受けかねない勇武を支える理念が、忠・孝である。忠・孝を核とする故に、暴悪ともみなされるその所業が容認され

るといのが為朝形象の構造といえそうだ。為朝の渡琉を、仕える親もなく君もない故と記す『鎮西八郎射往来』は、もはや、忠・孝をその生の指針として持つことができなくなった為朝像の本質を巧まずして言い得ている。古浄瑠璃においては、概して伸びやかに無邪気に描かれる為朝だが、勧善懲悪を標榜し、忠・孝や義・情の葛藤を主想とする時代浄瑠璃の世界では、その言行が余りにも翳りなくげざやかな為朝は、勇武の花とは成り得ても、作品の真の主人公には成り得なかったのではないか。題名に鎮西八郎の名を冠する作品においてすら、彼が事実上主人公的位置にはないと感じる所以もそのあたりにあるのではないか。<sup>(1)</sup>

小稿の考察においては、各作品の成立事情、時代相、作者の個性などが等閑にされているとの批判があるうかと思う。この点、怠惰との誹りはまぬかれまい。ただ、以上のような粗雑な通覧によっても、諸作を通じて、保元の乱の把握や為朝形象に一つの法則性・普遍性が読みとられることは確認できたと思う。

その他、為朝を主人公とする浄瑠璃作品に、文化五年（一八〇八）佐川藤太によって作られた『築紫の白縫 鎮西八郎誉弓勢』があるが、これは『椿説弓張月』を改作したものであることが知られている（角書の「築紫の白縫／吾妻の鯉江」から察せられる如く『弓張月』の前篇・後篇を下敷きとしたもので、琉球を舞台とした続篇・拾遺・残篇は利用されていない）。該作は、登場人物や大筋を『弓張月』に依りながら、大胆で

自由な改変を行っている。中で、重仁親王を大きく取り上げ、彼への忠という形で為朝を形象化している点は、先行の浄瑠璃作品の影響を受けたものと思われるが、『保元物語』ではなく『弓張月』との係わりから論じられるべき作品なので、小稿での考察は控え、別の機会を待ちたい。

(1) 諏訪春雄氏「時代と世話―近世演劇の発想―」（『文学』昭41・一）、後に、日本文学研究資料叢書『浄瑠璃』（有精堂出版 昭59）に採録）は「時代浄るりの登場人物は、ある瞬間には全場面を占有して、劇の進行を司る司祭者となるが、彼の優位は永続せず、次の瞬間には別の司祭者にとって代られる。」という意味で、時代浄瑠璃には「全一曲を通じて、強力な主人公」が存在しない、と説かれるが、それは、浄瑠璃が世界とした軍記物語にも充当する性格と言える。また、向井芳樹氏（『近松の方法』桜楓社 昭51）は「時代浄るりは人間を描くことを第一義にはしていない。（略）時代浄るりにおける人間像は、人形の首によって分類される程度の類型が目指されているに過ぎない。しかし、時代浄るりの人間像はそんなに卑小なものばかりではない。ドラマのなかで果す役割という点では、世話浄るりの人間と対比すると、かえって積極的な人間としての魅力さえそなえている。」と述べられる。